

『虚栄の市』におけるベッキーの「技巧 (Art)」に関する考察

挫折する模倣と不完全な語り

岡本佳奈

1. はじめに

本発表はウィリアム・メイクピース・サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) の小説『虚栄の市』 (*Vanity Fair: A Novel without a Hero*, 1847-48) を取り上げ、作品の中心的な登場人物であるベッキー・シャープ (Becky Sharp) の「技巧 (art)」を分析する。スタイン侯爵 (Lord Steyne) 家のパーティにおいてベッキーが歌手たちに親切に話しかける様子を指して、語り手は「本人も認める通り、彼女自身アーティストだったのである (“She was an artist herself, as she said very truly”）」(638) と表現する。ベッキーは自らの「技巧 (“art”）」を駆使し独力で階級上昇を目指す点において、ヴィクトリア朝時代の性規範から逸脱する女性にも思える。だが先行研究では、彼女はあくまで社会に求められる女性のジェンダー役割に迎合しているという点において、フェミニズムの観点における限界を持つことが指摘されてきた。本発表は、そうした役割を意識的に演じる彼女の「技巧」と本作の語り手の姿勢を再考察し、本作がヴィクトリア朝的なジェンダー規範に留まらない作品であることを示す。

2. ベッキーの位置づけにまつわる難しさ

『虚栄の市』は、二人の少女ベッキーとアミーリア (Amelia) がチジック・モール (Chiswick Mall) という寄宿学校を卒業する場面から展開する。孤児であるベッキーは、学校を卒業した後ガヴァネス (女家庭教師) として働かなければならず、社交界での地位を確立するにあたり、自らの力で結婚市場の中から夫を勝ち取ることが第一の目標となる。ベッキーの行動力は、ヴィクトリア朝時代の理想的な女性像が持つ閉鎖的なイメージ、すなわち家庭という聖域の守護を義務付けられ、親密圏に縛られた「家庭の天使」像とは対照的である。

だが、このようなベッキーのエネルギーや技術 (“art”) をむしろサッカレーのミソジニーの表れとして解釈する批評も存在する。その代表例がサンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーの『屋根裏の狂女』 (*The Madwoman in the Attic*, 1980) であり、強力な怪物として描かれるベッキーの姿には、「男性の女性に対する恐怖、とりわけ女性の創造性に対する糾弾 (“male dread of women, specifically, male scorn of female creativity”）」

(29) が表れていると指摘する。またさらに、ベッキーの行動力が既存のジェンダー規範への従属と捉えられる場合もある。エリザベス・イーストレイク (Elizabeth Eastlake) は、『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1848) と『虚栄の市』におけるガヴァネス (女家庭教師) 表象を比較し、ベッキーにはある程度の「女性の邪悪さ (“feminine wickedness”）」 (Eastlake 158) が見られるものの、彼女には「絶妙な機転 (“exquisite tact”）」 (Eastlake 159) があり、「我々を落胆させることも怯えさせることもない (“Becky never disappoints us; she never even makes us tremble”）」 (Eastlake 159) と述べる。ベッキーは才気に溢れる行動的な女性であるが、ジェインと比較した際、社会にとって「より危険が少ない (“less dangerous”）」存在である (Thomson 46)。これは、ベッキーが自身の能力を「狡猾に (“artful”）」、あくまで男性中心主義的な枠組みに適合するため用いているためである。

先行研究において、ベッキーが可動的かつ可変的なヒロインであるという見方は共有されつつも、彼女の行動力をヴィクトリア朝時代のジェンダー規範を乗り越えるものとして評価すべきか、むしろ規範への従順さとして捉えるべきか、もしくは作者の女性嫌悪の表れとして見るべきか、その評価は固定化しないままである。そして本稿は、ベッキーという人物についてフェミニズムの観点からその評価を結論付けようと試みるわけではない。本稿が着目したいのは、ベッキーという人物の真の正体ではなく、作品においてなぜこれほどにベッキーの正体が捉えがたいものとなっているのか、という問題である。

3. ベッキーの技巧 (“art”) とその限界

ベッキーは、複数の意味で「アート」を身に付けた人物だと言える。まず彼女の母親はフランス人オペラ歌手、父親はイギリス人画家であり、ベッキーは確かにその出自においてアーティストの血を引いている。さらにベッキーは、歌、演技、外国語など、様々な「アート/技術」に長けたアーティストでもある。さらに作品の中では、様々な人の懐に巧みに潜り込むベッキーの「狡猾さ・ずるさ」を指す讒言として、しばしば “artful” という言葉が用いられる (*VF* 58, 36, 196)。オックスフォード英語辞典を引くと、“artful” という言葉には、「技能を持った器用な人物」のほかに、「狡猾な狡猾い人物」 (*Oxford English Dictionary*, def. adj. 2. b) という意味が存在する。ベッキーは賢さと同時に女性としての悪徳を備えた人物として認識されており、“artful” という

言葉はそうした要素を包括的に示す機能を果たしている。

様々な技法を用いて社交界に自分の地位を築いていくベッキーだが、彼女の階級上昇は順風満帆なものではなく、不義の疑いをかけられたベッキーは社交界を追われ、数年にわたりヨーロッパを放浪することとなる。彼女の行動は結局のところ表面的な物真似であり、「実体を伴った価値（“substantial benefit-stock”）」(VF 224) が存在しないという点にその弱点がある。だがベッキーの技巧が表面的なものであることが示される一方で、彼女の外面の下にどのような真の正体が隠れているのか、という点は作品を通してはっきりとしない。周囲の人々はベッキーのレイディとしての振る舞いが偽物であることを感知するものの、彼女の中身、実際にベッキーが犯した具体的な罪の輪郭をはっきりとつかむことはできない。ベッキーに対するこのような曖昧な位置づけを生んでいるのが、本作の語りの構造である。

3. ベッキーに向けられる語り

本作の語り手は、ベッキーをセイレーンに例える一方で、作中においてしばしば彼女に対して両義的な態度を示す。ベッキーとスタイン侯爵の金銭に関するやり取りが夫ロードンに露呈し、ロードンが彼女を糾弾する場面において、語り手はベッキーが「有罪であるか否か」を明言しようとしな（VF 677）。ベッキーが有罪であるか、つまり、スタイン侯爵から金銭的援助を受けていたとして、二人は不貞関係を持っていたのか、という審判の結論を語り手は留保する。「自分は無実だ」という白々しい言葉や、彼女がこれまで重ねてきた嘘や策略によってベッキーの有罪は限りなく確かなものだとは言えるが、それでもなお「彼女は有罪か? (“Was she guilty or not?”）」(VF 677) という問いに語り手自身がその言葉で答えることはない。

4. 作品の反英雄性

ヴィクトリア朝時代において、男性作家の「語り」には英雄的な意義が付されていた。同時代にはトマス・カーライル (Thomas Carlyle) の『英雄崇拜論』(*On Heroes, Hero-Worship, and the Heroic in History*, 1841) や、1845年の講演が元となったサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の『自助論』(*Self-Help*, 1859) などの影響により、英雄崇拜ブームが生まれた。19世紀中期における民主主義・合理主義の高まりにより求められた英雄とは、民衆の中に見出される道徳的で自助的な人物であった。こうした英雄像の希求は文学にも大きな影響をもたらし、カーライルを師と慕い、『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50) を著したチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) のように、数々の作家が「教養小説」という形で民主的英雄が育つ過程を記した。同時代の小説において、男性主人公が自身の世界を「見る」こと、そしてその中身を「語る」ことは、自身を自立的な英雄へと導く物語を具現化する方法として重要な意味を持った。

一方、本作品の「英雄のいない小説 (“A Novel without a Hero”）」という副題にも明らかのように、サッカレーは英雄主義に対して強い反発を抱いていたことで知られている。先行研究においてはこれまで、本作品の中心人物が女性であるベッキーとアミーリアである点、そして、両者の中でもとりわけベッキーの人間性が英雄性や道徳的な立派さからかけ離れている点に、作品の「反英雄性」が読み込まれてきた。これらの見方に加え、本発表は、ベッキーの本質に迫ろうとしているように見えて、客観的な結論に至ることのない曖昧な本作の語りの構造にサッカレーの反英雄主義的志向が組み込まれていることを指摘したい。

5. 終わりに

本作はベッキーの技巧深さを強調し、彼女の本質は最後まで捉えがたいものとして提示する。この点において、本作は女性の自由意志や権利の拡張を直線的に称揚する作品とは言い難い。だが、ベッキーの技巧とその背後の素顔をより不確かなものへと転じさせていく本作の語り手は、ヴィクトリア朝時代の英雄的かつ男性的な語りとは異質なモードを持つ。作品の女性表象と語りの相互的な関係に目を向けることで、ヴィクトリア朝時代のジェンダー構造の枠に留まらないものとして作品を読み解き、再考することができる。

引用文献

Eastlake, Elizabeth. “*Vanity Fair and Jane Eyre, and the Governesses.*” *Quarterly Review* 146. 1848, pp. 153-85.

Gilbert, Sandra M., and Gubar, Susan. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. Yale UP, 1980.

Thackeray, William Makepeace. *Vanity Fair: A Novel without a Hero*. 1847-48. Ed. John Sutherland. Oxford UP, 1983.

Thomson, Patricia. *The Victorian Heroine: A Changing Ideal, 1837-1873*. Oxford UP, 1956.